

2. 黒毛和種繁殖農場での肝蛭寄生例及び管内アンケート調査結果

大分家畜保健衛生所
○児玉彬・池堂萌果・佐藤邦雄

【はじめに】

肝蛭症（以下、本症という）は、以前は牛によく見られた感染症だが、副作用の少ない駆虫薬の普及等で発生が減少した疾病である。令和5年12月、管内黒毛和種繁殖A農場で肝蛭駆虫薬の誤った投与方法が確認されたので、当該方法での効果を確認するため糞便検査を実施したところ母牛から虫卵を検出した。このため、製薬メーカー、大学と協力して駆虫試験を行うとともに、管内黒毛和種繁殖農家へアンケート調査と高リスク農場の浸潤状況調査を行ったので報告する。

【材料、方法及び結果】

- ① 糞便検査：A農場は、母牛50頭規模の黒毛和種繁殖農場で令和元年に母牛から虫卵を検出後、駆虫を定期的実施。母牛12頭から糞便を採取しビーズ法により検査。うち7頭から虫卵を検出。また、肝蛭駆虫薬の誤った投与方法を確認。
- ② 駆虫試験：A農場の母牛25頭の糞便をビーズ法により検査。陽性牛への用法用量どおりの投薬と血液生化学検査（GOT、GGT）を実施。投薬後14日で全頭陰性を確認。血液生化学検査ではGOT、GGTともに5頭中4頭で数値の低下を確認。
- ③ 管内黒毛和種繁殖農場へのアンケート及び浸潤状況調査：A農場での事例を受け啓発用リーフレット及び肝蛭対策の実施状況アンケートを作成し管内黒毛和種繁殖農場へ啓発、27農場へ調査を実施。アンケート結果から罹患リスクの高い6農場67頭の糞便をビーズ法により検査。1農場2頭から虫卵を検出。

【まとめ及び考察】

糞便検査と駆虫試験の結果から虫卵検出は駆虫薬の用法外投与が要因であり、用法用量通りの投薬で駆虫を確認し、肝機能も回復した。また、副作用（食滞）は認められなかった。感染経路は同じ新ワラ給餌の農場から虫卵が確認できなかったこと及びA農場の放牧地に水辺があり巻貝が生息していたことから、放牧地での由来と推察した。

アンケート結果から高リスクと判断した6農場67頭のうち虫卵が検出されたのは、1農場2頭と罹患率は低かった。この理由は、以前投与していた薬剤の駆虫効果により肝蛭の生活環が途切れたためと推察した。また、駆虫を実施していない農場も多く、肝蛭が人獣共通感染症であることを全農場が把握していなかった。

近年野生獣からの本症の感染事例が報告されており、清浄化の困難な疾病であると判明している。予防方法や症状の適切な内容をくりかえし周知することで地域一体の駆虫の徹底と生産性の向上をはかりたい。